

第303回 令和8年10月6日（火）

「否定すること、されること」

プロ野球でひいきのチームが違う友人と、戦ったらどっちのチームが勝つか議論することにより抵抗感を持たないと思います。むしろそういう話ができるからこそその楽しみもありますよね。

特定のチームの好き嫌いによって、その人の人格を疑ったり否定したりすることはまずありません。でもそれが会議の場などで意見を述べるときには気持ちが変わってしまいます。自分の意見が反対をうけると自分自身が否定されているような気持ちになりがちです。

外国人はYESでもNOでもはっきり意見を表明します。意見を求められても何も言わないときには肯定と見なされます。あとで反対だったと言っても「あのとき何も言わなかったじゃないか」といわれるのがオチです。

はっきり意思表示をしない人間は海外では評価が低くなります。自分の考えをしっかりと言葉にできないのか、何かを隠したいのか、どちらにせよ信用を得ることは難しくなります。

自分の意見を否定されたとき、海外の人は意見にNOを言われただけで自分の人格を否定されたわけではないことを知っています。激しい議論をしても職場を出れば普通の人間関係に戻ることができます。ここは日本人が苦手とするところです。

心理的安全性という、気持ちの面で自由に意見を述べることができ、それによって人格を否定されないと保証されていることが大事になります。日本の場合、上司にたてついたとか、自分の邪魔をしているとか、自分の意見に反対する人間に悪意があると考える傾向が少なからずあるような気がします。その結果意見を述べることに消極的になります。特に相手と対立する意見を述べるときには勇気が必要になってしまいます。

サッカーワールドカップでレッドカードを出されて次の試合に出場停止となるはずの選手が1年間の出場停止の猶予となることが発表されました。対戦国やヨーロッパのサッカー協会は一斉に批判しました。

日本は規律正しくルールを守る国民性を持っています。ルールを曲げてまで勝とうとすることはありませんし、それは日本古来の武士道精神に抵触する行為だとわかっているので絶対やりないでしょう。しかし今回日本サッカー協会はコメントを出すわけでもなく、傍観していました。自分の国に関係していれば違ったのかもしれませんが、同じ大会で戦ったチームとして、大会の価値が損なわれるような行為には毅然として反対すべきではないかと思いました。

ルールを無視したらそれはスポーツではありません。それで優勝をしたとしても、他国から心からの祝福を受けることはないのではないのでしょうか。